

未来経営研究会 通常総会・第2回例会(講演会)

代表世話人 平野 一昭(西部生コン㈱ 代表取締役)



日時：平成 30 年 12 月 18 日(火)

17:00～17:50

会場：ホテル東日本宇都宮

2 階『平安』

参加者：48 名

【会社概要・建設業界の現状】

中里建設は、今年で創業 98 年目を迎えました。長い歴史の中で、橋を造ったり、中学校を造ったり、河川工事等の公共建設事業に携わってまいりました。この間に栃木県知事優良工事表彰も 14 回受賞しております。

我が国の建設業の現状を申しますと、建設投資額は、平成 4 年に 84 兆円のピークから、全国的には 20%～30%以上落ち込んでいます。公共機関の発注額ですが、32 兆円であったものが、今は 10 兆円減っております。

建設業に従事する技能者、労働者の減少ですが、高齢化が進み 55 歳以上が 3 割を占め、30 歳未満が減っている現状にあります。

当社の売上は、私が入社したのが、昭和 61 年ですが、平成になってからの 30 年をまとめてみますと、平成の初めが 1 億数千万円だったのが、現在 4 億円を超え、30 年間で増加しました。この間、営業利益率は全国の中小企業水準同様に、なかなか 5%までには届きませんでしたが、会社が一番どん底であった平成 18 年に私が社長を引き継いで以降、なんとか右肩上が

講師： 中里 聡 氏

中里建設㈱ 代表取締役

演題： 「創業の理念をもとに経営革新

～次の 100 年を目指して～」

<略歴>

1964 年 田沼町生まれ

1986 年 日本大学理工学部土木工学科を卒業後、
中里建設株式会社へ入社

1999 年 同社代表取締役専務に就任

2006 年 同社代表取締役に就任

2015 年 (一社)日本水中ロボット調査清掃協会専務理事に就任、
同年 アクアピグで特許を取得

2018 年より、史跡唐沢山城跡保存会会長に就任し、ガイド等を通じて地元の魅力を発信する活動も精力的に行っている。

りで経営を回復させてまいりました。

私が中里建設を引き受けた時点で、様々な問題点がありましたが、経営理念も社是も何も無く、原価管理やら経営計画等も無く、社員等のモチベーションも低下しており、社内的にたいへん不安定な経営状態でした。

どうやってこの会社を立て直すか、あるいは会社を存続するためにはどうしたら良いのか、ほんとうに悩みました。

【経営理念と新規事業】

そのような頃、佐野青年会議所の先輩経営者に誘われて、ある経営研修を受講していましたが、その研修で会社の経営理念をつくりなさいと言われました。当社に最も適する経営理念って何だろうと考え、まず当社の歴史を振り返ることから始めました。

実は、当社の創業者は井戸掘りから起業しました。水不足で困っていた地域の人々のため、命を繋ぐために井戸を掘ったのだと思います。

そして、それからずっと長きにわたり、公共の建設事業に携わってきた公共工事の請け負いをメインとしてきた会社であります。

当社は、この長い社歴を踏まえ、これからも生活の基盤となるライフラインを護るととも

に、新たなライフラインを創り・維持していく会社であり、何業かと問われれば《ライフライン創造業》であると気が付きました。

すなわち、お客様が安全・安心な生活を営むためのライフラインを確保し、そして未来の子どもたちの新しい生命を創るために、豊かで快適な生活の創造を目指そうとして、経営理念を『いのちを護り、生命を創る』と決めました。

創業者の思い、創業の精神に立ち返り、創業以来の生業である《ライフライン創造業》を土台にして生まれた経営理念をもとに、これを会社経営の太い根幹として、全ての事業がこの経営理念に即しているかどうかを経営の判断基準にしようと決めました。

そしてこの経営理念を実施するために品質方針を定め、様々な問題解決のための社内改革を行い、経営理念に則り新規事業を開発する等の経営革新に取り組んでまいりました。

私が専務であった平成 16 年から、ロボット清掃という事業を始めていましたが、社長就任後の平成 19 年に、会社の現状と将来的な建設不況の到来を見越して、従来の土木建築工事業とは違う仕事が必要になってくるだろうと思い、水理部門を創設しました。

そしてこの時、経営理念に照らし合わせたところ、インフラの最たるものは『上水道』であって、これはまさしく経営理念に即した事業であり、当社が担うべき事業であると大いに腑に落ちまして、『水理事業』を開業しました。

そのおかげで、この 10 年を経て最近『水理事業』関連の様々な表彰をいただいたり、あるいは今回ご臨席されています国際協力機構 JICA 様の案件化調査事業に採択されるまでになりました。

水道が国内に引かれて 130 年が過ぎました。水道普及率は 98%を超えていまして、国民皆水道、世界に冠たる日本の水道と称えられるように、公園に行っても子どもが蛇口に直接口をつけて水を飲むような慣習・文化は、世界で日本だけだと思います。

そのぐらい、日本人にとって空気のように当たり前に感じている水道が、海外では非常に難しいことはおろか、実は国内でもメンテナンスをしなければいけない状況にあるということを知っていただきたいと思います。



それから、水道管だけではなく、つくった飲料水を貯めるタンク・配水池、こちらいろいろと問題がありますので、そういった水道施設をメンテナンスしていこうというのが、『水理事業』による提案でございます。

実は道路下に埋まってる水道管は、国内に 65 万キロメートル余りあります。それは凡そ地球 16 周分以上、地球から月までが 38 万キロメートルですので、月まで行って帰ってくるぐらいあります。民間の水道管を入れたらもっと膨大になりますが、公営水道としては、栃木県だけでも 1 万 5 千キロメートルあることを知っていただきたいと思います。

また、私どもの『水理事業』では、配水池内の水を抜かずに、ロボットで清掃しようとして提案しています。そして、上流にあるということは、おそらく下流にもあるだろうということで、水道本管の中を人間と同じように内視鏡カメラでのぞいたところ、やはり汚れているので、掃除をしようと考えたのが、この「アクアピグ」による洗浄工法です。

【アクアピグ工法】

「アクアピグ」は、消火栓とか空気弁から水圧で押し込んで、3,000 メートルを一気に洗浄できるメリットがありますが、他の工法で長距

離を一気に清掃することはなかなか難しいと思います。そして、水道メーターから先は、宅内の給水管ですが、これはオゾンを使った殺菌洗浄を行っています。最上流で水をつくるところから、エンドユーザーの蛇口に至るまで、一貫して水道管内をメンテナンスする、あるいは上水道施設を保全する、これが私どもの『水理事業』です。

水中ロボットはオイルレスで、濁らせずに、飲料水を家庭に供給運転しながら点検・清掃することが可能です。このロボット清掃工法は、水道事業者が上水道施設を維持管理する際にバイブルにしている、公益社団法人日本水道協会発行の『水道維持管理指針 2016』に掲載され、最近とても全国的に注目されています。

水道管内を洗浄する「アクアピグ工法」は、補助金をいただきながら、当社敷地内に実験場を造りまして、研究開発を行ったところ、特許を3つほど取得することができました。

この「アクアピグ」のような、縮んだり伸びたり自在に変化しながら、この1個のピグで洗浄することができる技術は、今までございませんでしたので、研究の上、開発できたということです。これまで

の私どもの洗浄1回の最長記録は実に2,780メートルです。

10月現在でこれまでに約5万メートルを洗浄した実績がありますが、長い距離を一気に洗浄すると、メーター当たりの単価が下がりコストダウンが可能になったため、他の工法と比べて優位性があるものです。

そして、海外展開におきましては、日本においてもこれだけの水道管内の実態があるわけですから、インドネシアの上水道など海外はもっとひどいところもあります。

先般、当社が宇都宮大学の山岡教授のお力添えを得て計画した、JICA 様所管の中小企業海外展開支援事業における案件化調査が採択されました。栃木県初の採択ということですが、来年、インドネシアにおいて、「アクアピグ工法」のテスト施工を実施することになりましたので、水道水質の改善等に努めてまいります。

当社のこの洗浄技術を提供することで、将来的には自分たちでメンテナンスをして欲しいなあと思っています。そのために、私どもが行って、現地のパートナーを募り、この技術を共有していきたいという風に考えております。

JICA 様の案件化調査事業が終わった翌年からは、普及・実証事業の計画を立てまして、またこれが採択されれば、現地のローカル企業と、さらにインドネシア国内に広範囲な営業展開を模索し、できれば「アクアピグ工法」に関する技術指針の作成に努めたり、法制化を検討するといったことに取り組んでまいりたいと思います。

中長期的には、果たして実現できるかどうか分かりませんが、インドネシアでビジネス展開できれば、他国ではもっとできるような気がしますので、インドネシアの実績を一つのモデルケースにして、他国にこれを展開してまいりたいと思います。

【最後に】

最後に、最近、当社専務発案により、『いい仕事いい家庭つぎつぎとちぎ宣言』を行い、また、とちぎ女性活躍応援団にも登録いたしました。当社では女性社員が現場に出ていますので、女性が活躍する職場づくりにも積極的に取り組んでいきたいと思っています。

また当社では、「アクアピグ」等を活用した『水理事業』を通して、持続可能な開発目標SDGsの達成に向けて、積極的にチャレンジしていきたいと考えております。

